

## 新年を迎えて

(財) 交流協会高雄事務所長 野中 薫

ここ台湾では、4年に一度の総統選挙及び同日選挙となった立法委員選挙が1月14日に行われ、現職の馬英九総統が再選されるとともに、立法院においても与党国民党は議席を減らしたとはいえ、安定多数の64議席を確保する結果となりました。大接戦との選挙前の予想にもかかわらず、馬英九総統が民進党候補の蔡英文主席に80万票の差をつけて第13代総統に選出されるや、メディアは一律に、馬氏の再選は、中台関係を劇的に改善した業績と「統一せず、独立せず、武力行使せず」の現状維持路線を有権者が評価し、変化より安定を望んだからであり、「92年合意」を巡る議論が勝敗を分けたといった趣旨の論評を掲げました。他方で、選挙戦では、馬氏は蔡氏から貧富の格差や失業問題の深刻化等を批判され、苦戦を強いられたことも事実であり、こうした問題の解決は今後の馬政権の重要課題となるのではないかと考えます。

これら選挙の結果については、日本の新聞等でも大きく取り上げられており、皆様もよくご存知のことと思いますので、ここでは詳細は省かせて頂きますが、高雄からみて今回の選挙の結果を通じて印象的に感じたことが2点ありました。

ひとつは、伝統的に野党・民進党の強力な支持地盤と言われる高雄、台南にあって、総統選の得票差が民意調査の予想ほどには開かなかったという点です。同日に実施された立法委員選挙では、民進党が高雄市で9議席中7議席（国民党2議席のうちの1議席は、陳水扁前総統の子息が無所属で立候補したため、民進党票が分散し、国民党候補が漁夫の利を占めた結果）、台南市においては5議席の全てを獲得するなど、民進党が圧倒的な強さを示したにもかかわらず、総統選に関しては、台南市での得票差は約20万票、高雄市のそれは約15万票にとどまりました。これは、民進党を支持する有権者の中にも、安定と良好な兩岸関係がもたらす経済的効果に一定の配慮がなされ、「総統選は馬氏、立法委員は民進党」という、いわゆる「分票意識」が作用した結果ではないかと思われます。二点目は、屏東県における得票差が6万票に過ぎなかったことです。一連のスキャンダル騒ぎから汚職問題で揺れた陳水扁政権時代の民進党の負のイメージが拭いきれなかった等の事情が

あるにせよ、屏東県は蔡英文・総統候補・蘇嘉全・副総統候補両者の地元であり、この結果はいささか意外なものでした。

党勢拡大を目指す国民党の活動が南部にも徐々に浸透しつつあるとの声が聴かれる中で、こうした結果が一過性のものか、それとも「南部は緑」という伝統的な図式に変化が現れる兆候なのか、非常に興味深いところであり、今後とも注視していきたいと思っています。

選挙の熱気が冷め、春節（旧正月）休みも終わり、いよいよ台湾も文字通り「新年」を迎えました。旧暦の1月15日前後には毎年台湾燈會（ランタン・フェスティバル）が各地で開催されますが、高雄では一足先に1月29日に開会し、開会式で打ち上げられた多数の花火が愛河の夜空を色とりどりに染め、その美しさは観客の目を釘付けにしました。

この高雄ランタン・フェスティバルには、毎年、日本、米国、韓国、豪州の姉妹都市代表団が招かれており、日本からは今回も八王子市長一行が出席しました。高尾山がある八王子市と高雄市は「タカオ」繋がりが縁となって、2006年に姉妹都市関係を結んでおり、黒須市長は既に10回も高雄市を訪問しています。同市長はこのたび3期12年間の市長職を退くことになったのですが、最後の公務を高雄市訪問とするほどに高雄市を愛しており、昵懇の間柄となった陳菊市長は惜みつつも黒須市長に「荣誉高雄市民」の称号を与え、これまでの尽力に感謝の意を表しました。また、同行した八王子市民団の中には、今年で4年連続参加という人が何人もおり、高雄市政府から記念品が授与されました。黒須市長は来月にもNPOを設立し、日本と台湾、就中、八王子・高雄の交流促進に引き続き尽力したいと述べていました。

現在の日台関係は、馬総統が「過去40年間で最良」と評するほどですが、こうした関係は一朝一夕に築かれるものではなく、台湾を愛する多くの人々のたゆまぬ尽力の積み重ねの結果であると考えます。黒須市長が新たに設立されるNPOが更なる日台間の交流の発展に寄与されることを大いに期待しつつ、「龍年」の今年が日本、台湾にとって幸多き年となりますよう祈念しております。「新年快樂！」今年も一年宜しくお祈りします。